

## 幕末期海岸防備対策からみる明石藩の特質

— 家老 黒田長棟が残した史料からみえてくるもの —

義 根 益 美

はじめに

晴れ渡る日の明石港からは淡路島を正面にして右手に四国や家島諸島を、左手に関西国際空港のある大阪南端まで見渡すことができる。播磨灘と大阪湾と明石海峡の關係を砂時計にたとえるなら、くびれの部分にあたるのが明石海峡である。この狭くて潮流の速い海峡は船種、国籍、仕出港、仕向港も様々な客船や貨物船、操業漁船など多種多様な船舶が密集することから「海の銀座」とも称される。船体に大きく肉眼でもわかるように記された横文字によって、内海であるが主要な国際航路であることを実感する。この海峡の最峽幅は約二海里（約三・七キロメートル）、その上に明石海峡大橋が架かり、本州側の橋の袂には明石藩舞子砲台跡の記念碑が建つ。文久三年（一八六三）に巡検した將軍・家茂の命により、明石藩が幕府からの拝借金一万両を含めて二万両を費やして、勝海舟指導のもと改築した砲台跡である。明石藩はこの辺り一帯の海岸防禦を担うため、この砲台を含む十二カ所の台場を築いた。嘉永六年（一八五三）のペリー来航以降のことである。

潮流の加減など自然現象によつてはかなり沿岸部に近い航路をとる船舶を目の当たりにすると、「日本者四面海洋に臨み候御國柄ニ候得者、定りたる場所も無之間、何時何方江可罷越も難計候得共、沿海平常其備有之候」という意識を持っていた江戸幕府のもとでは異国船が瀬戸内海を航行して大阪湾に至るといふ航路をとった場合、大阪湾防備を強化するためには最峽部の松帆（淡路島側）と舞子（本州側）の両方に砲台を造つて異国船を挟み撃ちにするとい

う計画は自然な発想だっただろうと思う。しかしブチャーチン率いるロシア艦船ディアナ号が紀淡海峡から大阪湾に向けて北上し塩屋沖で進路を東にかえる航路をとったように、塩屋沖で進路を変えるのが自然である。逆方向になる岩屋から明石を経由する必要はない。シーボルトがもたらした鳴門海峡に関する情報を得ていた欧米諸国が、淡路島の西側から明石海峡に入ることはまず考えられず、武力をもって開港を求める戦略ならば小島が点在する瀬戸内海よりも外洋航路をとるだろうし、その地形的特質からも船舶交通の難所である海域を避けるのが普通だと、だからこそ一回も使用されることなくその使命を終えたのだらうと、私は考えるのだけれども。だが川路聖謨ですら岩屋・明石間を海岸防禦の重要拠点とした当時<sup>3</sup>にあつては、このような地理的条件にある明石地域を領有する明石藩が、幕府の海岸防禦策と無縁に藩政を推し進めるなど不可能だっただろうことも想像できる。

明石藩が幕府の大阪湾海岸防備体制に組み込まれるのは、文政八年（一八二五）のことである。だが明石藩の海岸防禦に関する研究は嘉永六年以降に集中し、それ以前の状況については空白になっている。それは単にロシア艦船ディアナ号が大阪湾に出現するまで大阪湾防備に幕府がさほど関心がなかったのを幸いに、明石藩は何も対策を講じていなかったということなのだろうか。安政二年（一八五五）「藩政、特に海防に精励なるを賞す」<sup>4</sup>と幕府から賞されたのは自費（隠居料）で大砲を鑄造した前藩主・斉韶「崇翁」であつて、現藩主・慶憲ではない。このような嘉永六年以降の明石藩の姿勢を前田結城氏は「明石藩主の対外政策の無定見」「政治的な能動性には欠けていたが、幕府の政策実行過程への協調性は有していた」<sup>5</sup>と指摘する。その明石藩像は、同じ海岸続きの藩でありながら自藩を「大坂防禦のための軍事拠点」と認識し嘉永三年から海岸防禦にむけて主体的な行動を起こした尾崎藩とは対照的である。

なぜ慶憲は明石領内における海防に積極的ではなかったのだろうか。彼には危機意識が欠如していたのだろうか。朝に夕に日々、明石海峡を航行する船舶を見ていただろう藩主や藩士もまた、今の私と同じように、その意義を肯定していなかったということはあり得ないのだろうか。明石海峡は海防の重要拠点と誰もが認識していたと解釈してしま

っていいのだろうか。明石藩家老をつとめた黒田半平長棟<sup>6</sup>が残した海岸防禦に関する史料のほとんどは作成者や作成年の記載がなく、下書きか控なのかも判明しないため今後の調査を必要とするのだが、その中に作成年代が推定できる史料が含まれていた。幕末明石藩の特質を検討するにあたって一つの手がかりになるだろう海防対策に関する史料をこれから順次紹介する。

## 一 明石藩主・松平家の内情と家老・黒田長棟

海岸防禦に関する史料を紹介する前に、文政八年（一八二五）以降の明石藩が幕府の海防策と連動するように変化していく様子を紹介しておきたい。大阪湾防備体制の枠組みに明石藩が組み込まれた同年は、徳川将軍家斉に十四代藩主・直韶<sup>7</sup>（斉韶）の養子として迎えることになる二六男周丸が誕生した年でもある。

「松平家記」<sup>7</sup>によれば、直韶が老中水野出羽守から呼び出しを受け、「周丸様 御養子被仰出候御沙汰之趣御内々御達」を告げられたのは、文政十年閏六月十三日のことである。その後、七月二日に同七日登城するようにという老中連名の奉書が届く。登城した直韶は、「公方様 内府様 御座之間 御上段江御着座、御次之間江御老中方御列座」のなかで「周丸様御事御養子被 仰出」「周丸様江被遊 御対面」、養子縁組が成立する。七月二七日には「殿様被遊 御登城 御養子之御礼首尾」よく進み、周丸を「若殿様」と称することとなった。

この縁組に関しては、その前年九月七日に直韶の長男・濤次郎（直憲／慶憲）が誕生しており、自分の生んだ子が次期藩主になれないと知った母・季遠姫は嘆き悲しみ憤死（自害）したという話もあるが、木村修二氏によれば周丸を養子に迎える話は、濤次郎誕生前に既にあったという<sup>8</sup>。となると、明石藩は海岸防禦の任務と將軍家との縁談という二つの話を同時並行的に受容する決断をしていたことになる。長男でありながら「海中に高くうねって起こる波」を意味する「濤」の字と次男と勘違いするような「次郎」からなる「濤次郎」と名付けられたのも、そのあたりの事

情を仄めかすのかもしれない（その後の明石藩の歴史を象徴するような幼名でもある）。その濤次郎は九月十六日、江戸を発駕、十月二日明石に到着、臨水亭を住居として明石で暮らすことになる。<sup>9)</sup>

天保十一年（一八四〇）、幕府にアヘン戦争の勃発と中国の劣勢が伝わった年、十四代藩主・斉韶は隠居、斉宜（周丸）が第十五代明石藩主に就任する。明石藩が二万石を加増され十万石格八万石の家格となった同十三年、幕府は異国船打払令（無二念打払令）を撤回して天保の薪水給与令を発令。幕府がオランダ国王からの開国勧告を謝辞し、江戸湾・蝦夷地・大阪湾を海防の重要拠点と定めた同十五年、藩主・斉宜の病状は悪化、一月に明石町を通過するオランダ人一行を見聞したかもしれない直憲（濤次郎）は斉宜の末期養子となり、生きて明石の地を踏むことなく十九年の生涯を閉じた斉宜の跡をついで十六代明石藩主になり、慶憲と名を改める。

同二年「若殿様御附近習仮役奏者番格」<sup>10)</sup>に就任以来、斉宜（周丸）に仕えていた黒田長棟が家老格に昇進するのと同十五年である。弘化四年（一八四七）、黒田は家老に昇進、二二年ぶりに明石に呼び戻される。

幕府が頻発する異国船来航に江戸湾警備を強化し、さらに大阪湾警備体制をも視野に入れた弘化・嘉永年間、地理的にその重要拠点とされる明石藩は、物心つく前から明石の海を見て成長し藩主となった若殿様・慶憲と、早々に藩主を引退していた大殿様・斉韶、江戸定府期間が長く江戸での人脈を築いていただろう家老・黒田が舵をとる体制を整えていた。つまり国元を生活空間として育ったために中央とのパイプが薄く江戸の事情を感じたことはないが国元の状況には敏感だっただろう藩主は、実父である元藩主、長期にわたって江戸の状況を直接経験した有能な家老によって脇を固めていたことになる。この特徴をふまえうえて、明石藩は幕府の海岸防禦策や開港をめぐる問題にどう関わり、どのような判断をしていたのか検討したい。

## 二 大島治部左衛門からの書状

嘉永二年（一八四九）は阿部正弘が老中に就任して以来三度目の異国船打払令復活に失敗しつつも、海防強化に取り組んだ年である。その年も残すところ僅かとなった十二月二五日、幕府は海防強化令を発令した。後藤敦史氏が「最後の部分から「御国恩海防令」とも称されるこの海防強化令によって、阿部は対外問題が「日本闔国之力」で解決すべき問題であることを明示」「将来的な打払令の復活を示唆して対外的な危機意識を高めるとともに、「御国威」を守るため、身分にかかわらない挙国一致的協力を求めた点に、海防強化令の画期性を認めることができる」と指摘する幕令である。<sup>(1)</sup>

その翌年、明石藩士・尾崎雅人は、この触書の件に関して尼崎藩の藩士から問い合わせがあったので差図を乞う旨を記した三月八日付の手紙を、大坂にいる大島治部左衛門から受け取る。長くなるが全文を紹介する。

（封書 表書き）

「明石

大坂

尾崎雅人様

大島治部左衛門」

以剪紙申上候、然者一昨日尼ヶ崎類役遠藤三左衛門罷越面会致度旨二付、則面会仕候処同人申聞候者此度異国船御手当之儀二付旧蠟夫々御達有之候也二而、右御触面を以貴所様申来、則役人共茂色々評議取調罷在候得共、未タ差向兎や角与申手順運方も出来不申儀二而当時専ら調取懸り居候と申訳二ハ無御座候得共、御達面御趣意柄も在之候間追々取調、夫々手当向も致置不申而ハ对公边〇相済筋と役人共申合居候得共、御隣国御申合候援兵等之御打合いまだヶ様と申調も出来不申、先於尼ヶ崎御隣国と申候得者明石様、三田、高槻ニ在之、右御三家を以御

申合仕度含ニ候得共、三田、高槻ハ此地ニ類役無之、左候得ハ先ツ

御家様江万端御打合相願候外無之、勿論右御両家ハ御少高之儀

御家様ハ御高頭之儀ニ而候得者は非御援兵之处相願不申者不相成、夫々就而ハ何レ追々取調之上在所表合 御国許江役人共罷出、兼々之申合、御援兵之御手筈相願被申候坎、又ハ私共江委細申越、私合貴所様江御掛合可申様ハ成行可申也、其所ハ未タ見当茂無之如何様相成候也難計候得共、何レ合も御申合之处ハ相願申度含ニ役人共ハ罷在候得共

御家様御調之所相分不申而ハむさと御掛合茂出来不申、一応極内貴所様迄御問合申御国許之御様子合之处、承知仕候上、追々相願御掛相仕候儀之可在之何兎御国許より被申越承知罷在候也、将姫路様坏ハ御隣国之儀ニ付是等も御申合等之御調も在之候也承度段、右三左衛門申聞候間、右異国舟御手当被仰出候御触面之处ハ申参り承知罷在候得共、御隣国御申合等万端取調筋之儀ハいまだ不申条相心得不申旨及答候处、左候得者、御内々御国元御様子合之处為御聞被下度御国許御うつろい之处承知仕候得者追々相願候儀も可在之、少高之私方ニ候得ハ万事御家様江御助合相願不申者難叶筋合、今日ハ極内御問合罷出候儀ニ候間、表向ハ問合御掛合申上候筋ニ而ハ無御座、治部左衛門手元ニおいてハいか様之取調致居候也之儀相尋度由ニ申聞候、何レ国表江申越候上御内答可致旨申答置き候儀ニ御座候間、此段奉申上候、いか様ニ内々相答候旨可能哉、宜敷御差図被成下候様奉願候、何レ三左衛門口振ニ而ハ追々取調之上御国元御挨拶相同援兵等万端御申合之儀懸合在之而御座候、先ツ御地之御含御様子合伺出候趣ニ相見得申候、左様被思召可被下候、右之段奉申上度如此御座候以上

三月八日

雅人様

大島治部左衛門

月日しか記されていないこの手紙を嘉永三年の手紙と判断する理由を述べる前に、登場人物の紹介をしておく。大畠に面会にきた尼崎藩類役遠藤三左衛門なる人物は、尼崎市立地域研究史料館「尼崎藩家臣団データベース 分限」によれば文政十三年時点で、家禄は二〇〇石（本高一〇〇石）、役職は物頭であるが、嘉永年間にどのような役職についていたかは判明しない。

差出人の大畠治部左衛門もまた「座並帳」<sup>13</sup>には「高二〇〇石」とあるが、役職は不明である。「大坂」とあるので、嘉永七（一八五四）年九月にロシア艦船ディアナ号が天保山に碇泊したときに大坂蔵屋敷詰めの藩士として明石藩士を引き連れて市岡新田を警衛する以前から、既に大坂蔵屋敷にいて海防関係の役務を担当していたということだろうか。遠藤も大畠も役職を確定することはできないが、「類役」を「同じような役職」という意味に解釈すると、「三田、高槻ハ此地二類役無之」とあるから明石藩や尼崎藩にあるが三田藩、高槻藩には存在しない役職になる。この二人は全ての藩に共通して存在する役職ではなく、藩によつては設置する必要がある役務を担当していたことになる。

明石藩・尼崎藩と三田藩・高槻藩の根本的な違いは所領内に海岸を有するか否かである。それは例えば公儀浦触のような瀬戸内海沿岸地域に関する海事に関する触や達など幕府と藩の間を取り結ぶ役人が大坂にいるか否かの違いになるだろう。だとすれば二人はそういう役務についていたと思われる。例えば大畠は文久三年（一八六三）五月には將軍徳川家茂の舞子砲台巡視の件を、九月には大坂西町奉行所より受けた小笠原長行の瀬戸内海巡見の件を明石藩に通知したほか、明石藩の舞子砲台改築に関して明石藩の潮田范三と勝海舟との間に入るなど海防策に関する史料の中でも幕府と藩の間を取り持つ立ち位置で名前を確認できるのである。

さてこの手紙が嘉永二年の幕令を受けたものだとは判断する一つの理由は、文中にある「異国船御手当之儀ニ付旧蠟夫々御達有之」という文言である。この文言は法令の「此度被仰出候沿海警衛手當向之儀」<sup>14</sup>に対応する。二つめは「尼ヶ崎御隣国と申候得者明石様、三田、高槻ニ在之、右御三家を以御申合仕度含ニ候得共、三田、高槻ハ此地二類役無之、左候得ハ先ツ御家様江万端御打合相願候より外無之、勿論右御両家ハ御少高之儀／御家様ハ御高頭之儀ニ而



候得者は非御援兵之處相願不申者不相成」という文言である。幕令にある「家々之分限領地邊之広狭山崖海濱之險阻二も寄、砲台土台等之位置人数之配当之儀者、家々之見込籌畫も可有之儀二付不一般候得共、詰りハ攻撃守備之儀宜を考へ、平常無油断、急場之節も一陣之備者間ニ合候様致し、又小高之向忤者隣領江も兼而申合援兵等差出方之處、手筈合図等をも定置、都而実用之覚悟を主といたし」「兎角萬一之節者隣領よりも力を合せ、相互ニ援助致し候手筈も厚申合」を受けてのものであろう。

尼崎藩（四万五千石）は隣国として明石藩、三田藩、高槻藩をあげ、類役もおらず少高の藩である三田藩（三万六千石）や高槻藩（三万六千石）よりも先ずは類役がいて高頭の明石藩（一〇万石格八万石）に援兵の件について相談したい、援兵の件は明石藩の協力を仰ぎたいと明石藩を立てつつ、明石藩に負担を依頼している。しかも明石藩の隣国は姫路藩（十五万石）である。姫路藩との調整もあるだろうから、そのあたりのことも含めて内々に教えてほしいと言っている、どう答えましょうという内容である。播磨灘から大阪湾にいたる海岸部の防禦について、播磨国は姫路藩と明石藩が対応の仕方を協議されているはず、摂津国に関しては文政八年（一八二五）以来、武庫郡・菟原郡は尼崎藩の担当、八部郡は明石藩の担当になっている、現時点ではまだ何も幕府からの援兵要請はないがいずれ現実問題となるだろう、そのときには「小高之向忤者隣領江も兼而申合援兵等差出方之處、手筈合図等をも定置」「兎角萬一之節者隣領よりも力を合せ」との達でもあり、少高の尼崎藩としては明石藩へ助け合いをお願いしなくてはとても対応できない、どのあたりまで援兵に協力していただけるだろうか、国を超え、幕府領を挟んで隣国となる明石藩の意向を教えて欲しいのだという含みをもった問い合わせである。同じ摂津国にあっても少高の三田藩や高槻藩ではなく、親藩であり播磨第二の大藩でもある明石藩に尼崎藩は援兵の分担を依頼したといえよう。尼崎藩側にも明石藩側にもこの手紙に対応する史料が見当たらないので、明石藩がどのような返答をしたのか定かではない。

明石藩が大島にどのような指示をしたのか、その後正式な問い合わせがあったのかも定かではない。しかし尼崎藩が武器の修理や尼崎から生田川にいたる海岸警備を固めた同年、明石藩でも「近海江異国船致渡来候節、警衛防禦等



被為蒙 仰候ニ付、仲崎濱ニ而御人数立八月有之」<sup>(15)</sup>と海岸警衛防禦対策をとった要因の一つにはなつただろう。

<sup>(16)</sup>尾崎が大島からの手紙を自らの手元に留めおかず黒田に託したように、丹羽隼人もまた大坂の大島清三郎からの手紙を黒田に託した。差出人「大島清三郎」は、その筆跡から「大島治部左衛門」と同一人物と考えられる。文面は次の通りである。

(封書 表書き)

「明石

大坂

丹羽隼人様

大島清三郎」

以剪紙申上候、然者東町

御奉行所柴田日向守殿今昨十五日四ツ時御呼出ニ付、右刻罷出候処、懸りと力八田種藏を以て被相尋候者、此度異国船御手宛之儀ニ付江戸表今御沙汰有之、大坂支配国之分取調、江戸表江相伺候儀在之、尤兵庫津西宮駅者奉行所直支配ニ付、此辺江異国船渡来之節彼地勤番之もの今御案内次第御加勢被下度御頼為致訳柄ニ付取調罷在候処、摂州八部郡者

御方様御持場之趣ニ承知いたし候得共耽与相分り不申、弥左様ニ有之候哉承度、何分御方様御持場之所相心得不申而者取調方茂出来不申、依而及御尋候儀ニ有之候間、右御持場之所書付を以御答被下度、尤右海岸御防之儀最初ニ被蒙

仰候節之年号月日茂相分候得者承度、兵庫津者明石様御持場、西宮駅ハ尼ヶ崎持場之趣ニ承知いたし候間、弥八部郡ハ其

御方様御持場ニ御座候哉承度段御尋御座候間、得与取調之上御答可致旨申置引取候儀ニ御座候、依之此段申上候、

何卒御答方之處宜敷御差図被成下候様相願候、

尤、先年御触書初年之年号月日等茂被仰下候様仕度奉願候、右之段奉申上候  
如此御座候以上

二月十六日

隼人様

大島清三郎

摂津国八部郡の援兵に関する大坂東町奉行所からの問い合わせである。奉行所では幕府領である西宮駅は尼崎藩の持ち場、兵庫津は明石藩の持ち場だという把握はしている、ゆえに八部郡も明石藩の持ち場と理解しても良いのか、今ひとつ確証がないのでしつかり調査をした上で正確な回答をしていただきたいと奉行所から求めがあつたので差図願いたいという内容である。

手紙の冒頭に登場する「芝田日向守」（芝田康直）が大坂町奉行だつたのは弘化四年（一八四七）九月から嘉永四年（一八五一）五月までの間なので、この手紙の作成年代は嘉永四年までということになる。安政元年（一八五四）二月、代官川上金吾助・増田作右衛門が文化・文政期からの大阪湾の防備についての意見書を提出する以前に、大坂町奉行所では幕府領の防禦を担当する藩の確定作業をしていたことを、この史料は示している。ディアナ号が天保山に碇泊したとき西宮町までを尼崎藩、兵庫津を明石藩が持ち場としたことをふまえて八部郡も明石藩かと確認してきた史料ではない。丹羽あて書状が二月十六日と尾崎あて書状の日付三月八日より早く、大島が「清三郎」の名で登場するのはこの史料のみで、嘉永七年以降すべて「治部左衛門」なので嘉永三年と推定したのであるが、尼崎藩・遠藤の「役人共茂色々評議取調罷在候得共、未タ差向兎や角与申手順運方も出来不申」という文言からすれば、この手紙だけでは、嘉永三年か四年か確定できない。確定できないが、大坂町奉行ではディアナ号来航以前から諸藩の持

ち場を確定するための作業をしていたことがわかる。

黒田は丹羽あての手紙が届いた年を確定できそうな史料を残していた。嘉永三年に黒田が書き留めた「武備誌」というタイトルの冊子である。内容は「当家軍法」「軍役人数積」「嘉永三戌年御家中へ触達 明石海岸江異国船渡来り之節御人数立」「同年 明石近海江同断之節臨時警衛防禦并摂泉海岸へ同断御人数立」「天保十四年調 江戸十五騎一隊人数積」「同 公儀江御届振凡調」「天保十四年中取調 江戸異国船渡来防禦御人数立」「物頭控 御代官所より御人数相申頼来候節之覚」「天保十四卯年調 出陣用意の品」の九項目、全四三丁からなる小冊子である。その「同年 明石近海江同断之節臨時警衛防禦并摂泉海岸へ同断御人数立」において「明石近海江異国船儀渡来臨時警衛防禦二付被 仰付候節二付、摂州八部郡、泉州大鳥郡、泉州海岸江異国船儀渡来之旨、御代官より御案内次第左之通御人数可差出候」の文言があり、者頭二騎、目付一騎、足輕小頭共六六人、大筒撃手伝共九人などおよそ二二四人、兵馬十五匹などを充てる旨の記載がある。

つまり嘉永三年時点において異国船が渡来した場合、明石藩は代官所からの要請に応じて八部郡に援兵を差し向ける用意をしているのである。丹羽あて書状が嘉永三年ならば、明石藩は代官所の求めに応じて過去の事例を報告、その報告に基づいて奉行所では明石藩の持ち場を八部郡と和泉国大鳥郡・泉郡と確定、もし海岸警衛や防禦が必要になった場合には明石藩が援兵要請に応えるという手筈の取り決めを嘉永三年に確認していたことになる。

また「武備誌」からは、嘉永三年時点で明石藩は寛延三年（一七五〇）に定めた「当家軍法」を、異国船渡来時の海岸警衛・防禦に対応できるよう改善していること、天保十四年（一八四二）から海岸防禦対策に取り組んでいることが判明する。それは前年に出された海防に関する幕令<sup>18</sup>に対応したものだったと思われるが、所領のある明石ではなく江戸湾の海防対策を講じたところに明石藩の海防に対する姿勢が表れている。同十四年は幕府が江戸・大坂四方上知令を出した年であり、アヘン戦争に敗北した中国が広州・廈門・上海・寧波・福州の五港を開港した年である。藩主・斉宜は在任期間が短く「將軍の子」という色眼鏡が先行して、彼の業績が評価されることはないが、徳川

家の血筋である斉宜と江戸住まいが長い黒田というペアが江戸にいた時代である。単に幕令に従順だったというよりも、江戸湾防備対策を講じなければならぬという何かしらの情報を得ていた、情報を手する環境にあったのであるまいか。仮説である。今後の検討課題としたい。

### 三 嘉永六年、安政元年の明石藩

明石藩は二度にわたるペリー来航に際して二度とも江戸湾の海岸警衛防禦にあたった。嘉永六年（一八五三）六月のときは下屋敷に人数を揃え待機、ペリーが浦賀に来航した同三日、幕命により品川に出兵、明石から兵二〇〇名を呼び寄せ急行させた。二度目の来航に際しては十二月二三日に老中・阿部正弘から異国船来航に際して臨時出兵の内命があることを伝えられ、翌年正月二〇日から三月二二日まで神奈川警衛にあたった。なお藩主・慶憲は同二月四日には幕府に二番手人数の神奈川警衛地派遣要否の伺いを立て、その必要なしとの回答を得ると今度は大砲五門を幕府から借りて警衛地に送っている。<sup>19</sup>

その半年後には大阪湾にロシア艦船デアナ号が来航、明石藩は国元での海岸警衛にあたった。海岸警衛防禦に明け暮れた一年を明石藩士は過ごしたのである。

翌安政二年（一八五五）、幕府は紀州藩・徳島藩・明石藩に紀淡海峡及び明石海峡の守備を目的とした台場の築造を命じる。既に前年中に大蔵八幡浜・舞子東浜・出崎浜に砲台を築き、砲や弾丸の製造や大蔵八幡後方で洋式砲術の訓練を開始していた明石藩に対しては、大坂町奉行・勘定奉行の八幡砲台巡視があり、寺院の梵鐘を潰して大砲・小銃を作るようにとの幕命とともに、垂水村における一年間の射撃演習の許可がおりる。かくして海岸警衛防禦の要所に所領を持つ明石藩が、幕府の海岸防禦強化政策に組み込まれていくのは周知の通りである。

ところで品川警衛を命じられたのは明石藩下屋敷が現場に急行しやすい芝高輪（現・品川区高輪二丁目）にあった

からだと思われるが、この屋敷地、薩摩藩高輪屋敷（現・品川区高輪三丁目）のすぐそばである。隠居した島津斉興（松平大隅守）が居住していた屋敷である。ペリー来航の情報を前年十月には入手していた薩摩藩は万一、ペリーが品川沖まで侵入してきた場合、屋敷のある高輪・田町・芝あたりは大混乱になることを見越して、山の手あたりに都合のよい敷地を買い入れるよう江戸家老に指示、高輪屋敷に居住する隠居斉興も承知、四月には渋谷屋敷を完成させている。もちろん近隣に屋敷があるからといって明石藩が薩摩藩から何かしらの情報を得ていたとはいえない。だが薩摩藩の動きを明石藩が全く関知しなかったといえるだろうか。

また当時明石藩家老を務めた黒田家文書には「別段風説書」や「雲上秘事」といった通常では入手しにくいはずの史料が含まれている。「別段風説書」の表題は「丑年風説」<sup>22</sup>となっているが、「スウェーデン皇太子妃の出産」から始まり「出島オランダ商館医師薬剤師の件」にいたるまで、ペリー来航予告を含む全三八項目は嘉永六年（丑年）にオランダ商館から幕府に提出された「別段風説書」と一致する。ペリー来航に備えるに際して幕府から正式に配布されたものであるか。それとも独自のルートで入手したのだろうか。

「雲上秘事」もまた入手ルートが気になる史料である。表紙は「安政六己未年／雲上秘事／孟秋写之／心水舎主人」となっていて、心水舎主人すなわち黒田長棟が安政六（一八五九）年に筆写した史料である。内容は「亜墨利加船渡来後風説見聞所極密／安政四年七月渡来官吏ハリス。ヨリ段々応接有之」で始まり、開港にいたる過程を記している。最終頁は

- 一 堀田備中守ハ評判程ニハ無御座、恐縮致、至而とつ辨之人之由ニ御座候
- 一 川路左衛門尉ハ随分辨舌も宜敷候江共、格別智人とも難申候由
- 一 岩瀬肥後守ハ是ハ至而能辨、大凡三人ハ辨舌ニからまされ候由ニ御座候
- 一 右之外精々申入度義御座候得共、尚追而可申入候、此一巻ハ御覽後火中多罪々々 戊午三月十九日認

で締めくくられている。この「極密」と記し、幕閣首脳陣を快く思っていない人物の手による書類をも黒田は入手できる人脈を有していたわけである。

入手経路や入手時期なども含めてこれらの史料に関する分析は後日に譲るとして、ここでは幕府の対外政策に関する情報を主体的に入手する姿勢を持っていた家老が藩主のブレーンになって藩政を支えていたのが明石藩だったことを指摘しておきたい。

藩主・慶憲はペリーの浦賀来航を江戸参府期間中に、ディアナ号の天保山碇泊を明石帰国期間中に遭遇し、その両方に藩士を派兵した。警衛の現地を巡視した数少ない藩主である。天保山の守備にあたった大坂蔵屋敷詰の諸藩約六〇藩を除いて、守備地区を割り当てられた藩だけを対象としたとき、両方に派兵したのは福井藩（三三万石）、徳島藩（二五万七千石）、姫路藩（十五万石）と明石藩の四藩のみである。しかも自らの所領からディアナ号を確認したのは徳島藩、明石藩のみであり、慶憲の経験を共有できる藩主は徳島藩の蜂須賀齊裕だけである。その蜂須賀ですら、一月から三月までの長期にわたって所領からも江戸屋敷からも離れた武蔵国橘樹郡生麦、同鶴見（現・神奈川県横浜市）を警衛する任務を負った明石藩主の胸の内を共有することはできなかっただろう。

神奈川警衛では派兵の追加案や大砲の借用・配備など自発的な言動を表明した現藩主・慶憲は、幕府の対外政策に関する諮問に対し具体的な答申をしないまでも、幕府の方針に肅々と励むという回答をした。しかし和歌山藩の大砲整備に対して明石藩領域内の海岸警衛防禦が劣っていることを幕府に指摘されるのではないかと懸念を示し、大砲の鑄造を行ったのは前藩主・斉韶であった。それは単に明石藩が身動きのとれないほどの財政難に陥っていたからというよりも、慶憲が幕府ほど明石藩領内における海岸警衛防禦を重視していなかったからではないだろうか。慶憲には幼少時代からの経験や、江戸湾・大阪湾で異国船と対峙した彼自身の直接経験から導き出した結論に、「別段風説書」による海外情報や「雲上秘事」などを入手できるネットワークによって得た情報を加味して導き出した判断があったはずである。だが一藩主として答申したところで、幕府は幕府に都合のよい案を展開するだろう…という思いが、慶

憲になかったといえるだろうか。そのような慶憲に代わって斉昭が幕府の要望を見越した対策をとる役割を担うことで明石藩としてのバランスを保っていたといえないだろうか。

最後に膨らむ一方の借財を抱え財政難に陥り、藩士の俸禄を半減し自らも節約・儉約に務めつつ藩政に携わっていた黒田が座右の銘にしていただろう史料「水府慶山公壁書之写」<sup>(24)</sup>を紹介しておきたい。水府景山公とは水戸藩主・徳川斉昭のことである。

（端裏書）

「水府景山公御壁書之写」

水府景山公御壁書の写

- 一 毎得一飯兵糧之粗々敷を思ひ
- 一 衣を製するに甲冑の窮屈なるを思ひ
- 一 居宅を構るに陣中の不自由なるを思ひ
- 一 起居の安きに山野の苦敷を思ひ
- 一 父母妻子同居の兄弟親族と交ふるに遠国離去乃悲嘆を思ひ
- 一 今日は無事安穩を大幸とせバ何ぞ奢り乃念を生ん

嘉永七年甲寅春

まるで神奈川警衛時の明石藩主や家老の心情を代弁したような水戸藩・徳川斉昭の壁書を、嘉永七年春、ペリー退帆からディアナ号来航までの間に写したものである。<sup>(25)</sup> 海岸防禦や攘夷についての心得ではない。それだけに黒田の心に響く文言だったことだろう。



おわりに

文政八年（一八二五）以来、幕府の要求を肅々と受け入れてきたのが明石藩である。嘉永六年以降、急速に海岸警衛防禦対策に力を注ぎ始めたわけでもなく、所領を有する明石地域だけに目が向けられていたわけでもない。

ペリー来航時やディアナ号来航時に迅速な行動をとることができ、砲台や台場を築き、洋式砲術に対応できたのは、明石藩が早くから海岸防禦対策をしていた成果である。幕府にとっては一にも二にも江戸湾警衛防禦で、大阪湾防禦は二の次だっただろう。内海である大阪湾に異国船はそう易々と侵入するまいという意識があっただろう。だが、現場で仕事をしている者にとっては、もしもの場面を想定した対策を講じておかねばならない。嘉永三年の時点における大坂町奉行の取り組み、尼崎藩や明石藩の取り組み、日頃からの連携があつてこそその海岸警衛防禦だったのである。

明石藩の海岸警衛防禦対策は対江戸湾から始まり、対明石海峡が加わっていく。私達の目はついつい明石藩領があつた明石地域の海岸防禦に貢献した明石藩の姿、言い換えれば嘉永・安政期以降の明石藩に向きがちである。しかし、それ以前の基礎を固めていた時期にもっと注意を払う必要がある。藩主や家老がどのような人生経験を蓄積する過程で、政の判断を下していたのか、江戸屋敷や大坂蔵屋敷に詰めている藩士がもたらす情報を疎かにしないよう、彼等の報告を受けた担当者が、さらに上層部や同僚に報告する仕組みにあつたのが当時の明石藩だったということを、大島治部左衛門の手紙は語っている。

明石藩は日本が開国にむけて大きく舵をとっていく端緒となった二つの大きな事件に対峙した藩である。他の藩主が経験しなかった経験をした藩主を支えた家老が幕末維新期をいかにくぐり抜けていったのか、今回紹介した史料のさらなる検討をしていきたい。

〔註〕

(1) 海底部は複雑な地層をしていること、海峡幅の三分の一を占める約一三〇〇メートルの範囲に中央主流があり、主流の南側には激流を生じることがあること、大潮期には最速七ノットを超え主流の一・四倍になることから、船舶交通の安全上、問題の多い海域である。南健悟「明石海峡における航法の適用―海上衝突予防法と海上交通安全法の適用関係―」(研究報告編集委員会編『商学研究』第六四巻 第四号)

(2) 「海防部四 嘉永己酉二年十二月廿五日書付(嘉永訓令)「箭内健次『通航一覽編輯 第五巻』清文堂出版株式会社 昭和四八年 発行 四七―五〇頁

(3) 「撰海沿岸の台場設置箇所につき川路聖謨の上申書」兵庫県史編集委員会『兵庫県史 史料編 幕末維新史料一』平成十年三月発行 四七―五〇頁

(4) 安政二年十二月十八日 東京大学史料編纂所「維新史料綱要データベース」AN〇四六―〇九九〇

(5) 前田結城「幕末明石藩の政治的動向の基礎的考察」『巨 地域・大学・文化 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報

七』神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター 二〇一五年十二月発行 五一項

(6) 寛政十二年(一八〇〇)生まれ、文政六年(一八二三)御留守居(江戸定府)、天保五年(一八三四)御近習頭、同十二年(一八四一)御用人、弘化元年(一八四四)家老格、嘉永元年(一八四八)家老(明石)、文久二年(一八六二)筆頭家老、慶応二年(一八六六)没。木村修二「明石藩における藩主と藩士の履歴」明石市立文化博物館『企画展 館収蔵品展「明石藩の世界Ⅲ―藩主と藩士―」

二〇一五年十二月による。

(7) 黒田義隆氏資料 明石市所蔵

(8) 木村修二「明石藩士の日常生活をめぐって」(明石市立文化博物館『企画展 館収蔵品展「明石藩の世界Ⅱ―藩士の日常―」二〇一四年九月発行) 十五頁。『松平家御年譜』(神戸大学所蔵)の文政九年(一八二六)九月七日条、濤次郎誕生の記事「是よりさきつころ 公世嗣のなかりしかハ、御養君の事を竊に執政の人々に語り給ひしによりて、濤次郎君を太公(直周)の御末子とし

給ふ」を紹介する。なお「松平家御年譜」は黒田義隆編『明石市資料（近世編）第六集』（明石市教育委員会、昭和六〇年発行）に所収。

また「明石市史年表」（黒田義隆編『明石市史 上巻』昭和三六年発行）には「松平家年譜」からの引用として文政九年十一月二七日、周丸を養子にした旨を記している。

(9) 黒田義隆氏資料「松平家記」 明石市所蔵

(10) 木村修二「古文書が語る黒田家と明石藩主松平家」明石市立文化博物館『企画展 館収蔵品展「明石藩の世界Ⅰ―文書と絵画―」』二〇一三年

(11) 後藤敦史『開国期徳川幕府の政治と外交』有志舎、二〇一五年一月

(12) 黒田家文書「尼崎藩類役より異国船来航時手当の問い合わせにつき書簡」明石市立文化博物館所蔵

(13) 明石市立文化博物館『企画展 館収蔵品展「明石藩の世界Ⅲ―藩主と藩士―」』二〇一五年十二月発行

(14) 「海防部四 嘉永己酉二年十二月廿五日書付（嘉永訓令）」箭内健次『通航』一覽編輯 第五卷『清文堂出版株式会社 昭和四八年 発行 四七―五〇頁

(15) 黒田義隆氏資料「松平家記」 明石市所蔵

(16) 黒田家文書「大坂東町奉行所より異国船来航時の問い合わせにつき書簡」明石市立文化博物館所蔵

(17) 黒田家文書 明石市立文化博物館所蔵

(18) 石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成』第六巻、岩波書店、一九九五年発行

史料五一九一、天保十三年八月九日、三三頁

史料五一九二、天保十三年九月十日、三四頁

(19) 安政元年二月四日 東京大学史料編纂所「維新史料網要データベース」AN〇〇四―〇三六一

(20) 岩下哲典『幕末日本の情報活動「開国」の情報史』雄山閣 平成二〇年四月改訂増補版 七二頁、八〇頁

- (21) 黒田家文書 明石市立文化博物館所蔵
- (22) 黒田家文書 明石市立文化博物館所蔵
- (23) 松方冬子「一八五三（嘉永六）年の別段風説書蘭文テキスト」東京大学史料編纂所研究紀要 第十八号 二〇〇八年三月発行
- (24) 黒田家文書 明石市立文化博物館所蔵
- (25) 国立国会図書館所蔵 宮崎成身編『視聴草 第九八冊』掲載「水府景山公壁書」には「嘉永七寅年度五月」とあるので、黒田が写したのも同じ頃だと思われる